
Voice

つきよのこねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Voice

【Nコード】

N6754L

【作者名】

つきよのこねこ

【あらすじ】

幼い頃から病弱だったアリアは、村で一番やんちゃなダイルの妻となった。親友イエイと共に旅に出る夫を、もう何度も見送った。けれど、なぜだか胸騒ぎがしてよく眠れず、熱を出してしまったアリアは、不思議な夢を見た……。

（前書き）

この作品は、私が書いた詩を元に、当時参加していた会員制サークルの会員さんが、漫画を描いてくれたことがきっかけで生まれました。

その漫画は台詞が一切ない、サイレント漫画だったので…小説にする時に、キャラクターの名前なんかは私の方で作らせていただきました。

漫画とは随分違う雰囲気になっちゃった気もしますが、元は私の詩なので、その詩を書いた時の気持ちを作品に投影して書いたように思います。

今、読むとやはり色々と恥ずかしいのですが…これもあまり手を入れずにいきたいと思います。

この作品を書くきっかけを作ってくれた、私の詩から物語を紡いでくれた同じサークル会員だった、N様に心から感謝。

ではでは。しばらくこの作品の世界にお付き合い下さい。

何だか眠れない。

中途半端な時間に目が覚めてしまったアリアは、何度となく寝返りをうち、大きく溜め息をつく。

まだ夜は明けていない。陽が昇れば、また忙しい一日が待っているというのに、寝不足なんてことになったら体が持たない。

一年で一番忙しい豊饒のこの季節、村は総出で冬に備える為の準備に追われる。アリアも例外ではなかった。

今年一七になったアリアは砂漠に程近い、この村で生まれ育った。彼女の世界は、この狭い村の中のみである。世界がどんなに広がるうと、彼女がその世界を知ることはない。村の殆どの女性がそうであるように…。

天幕の仕切りの隙間から月明かりが差し込んで、辺りをぼんやりと照らし、世界を夜の空気が満たしていた。

どうにも眠れそうにないことに少々苛立ちながら、アリアは仕方なく体を起こし、寢床を出る。

天幕の外にゆっくりと踏み出した、その肩から色素の薄い栗色の長い髪が滑り落ち、冷ややかな月光が白い肌と固くなっていく、その表情を照らし出した。

目覚めた時から感じていた妙な胸騒ぎが真実味をおびて胸にすくっていき、彼女の細い体を震わせる。

「…ダイル。あなた…なの？」

アリアは白く輝く月を見上げ、思わず呟く。その声に、月は何も応えはしない。

物言わぬ白い月を見上げ、彼女は息を飲む。

まさか…彼の身に何かあったのでは…！？

不意に浮かんだ考えを、慌てて打ち消す。
いいえ…いいえ、そんな事は絶対にない。約束したのだから…必ず無事に戻ってくると、約束したのだから。どんな事をしても必ず約束は守ると、彼は言ったのだから…。

不安に揺れる翡翠色の瞳を隠すように瞼をそつと閉じて、アリアは胸元の銀色の首飾りを強く握り締めた。

二つ年上のダイルは、幼い頃から何や彼やと問題を起こしては村人たちを呆れさせている人物^{もんだいじ}だった。

一年に何度か高熱を出して寝込んでしまふ、決して丈夫とは言えない少女^{こせう}だったアリアにとって、彼は異邦人に近い存在で、殆ど一緒に遊ぶことなどなかった。何度か、見舞いに来てくれた事はあったが、特に親しい訳でもなく、小さな村の中では年が近い子供達は皆、顔見知りであり、幼なじみという感じだったので…彼も、そんな名ばかりの幼なじみの一人にすぎなかった。

だから、一五歳になったアリアに彼が唐突に結婚を申し入れて来た時、彼女はとても驚いた。

けれど、彼には前々から別の幼なじみの少女との噂があったので冗談に違いないとアリアはすぐに思った。本気ではなく、ほんの気まぐれか悪戯心を起こしてのことで、すぐに諦める筈だと信じて疑わなかった。両親を通して丁重に断りさえすれば、この話はすぐに終わると思っていた。それで簡単に事は済むはずだった。

ところが、アリアの予想を裏切り、ダイルは自分の為に花を摘み、珍しい物が手に入ったからと、毎日やってくる。

自分は彼の求婚を断り、そればかりか彼を無視し、会うことすらせず、自分の天幕から出て来る事など決してないのに、ダイルは一日も休まず、三ヵ月近くアリアのもとに通い続けたのだ。

おかげで『傭兵^{ヤッ}などしている男に大事な娘を嫁がせる気はない』

と断言していた両親まで、『あんなによくして下さるんだから』と、すっかりダイルの肩を持つようになり…。

だからって、素直に結婚する訳にはいかない。

このままでは、あれこれ理由をつけて、両親が独断で結婚に踏み切りそうな勢いで、アリアは内心生きた心地がしなかった。

いったいどういつもりなのかわからないが、ダイルの気まぐれな冗談に付き合う程に自分は暇ではないし、頭が悪い女でもないつもりだから、他をあたってほしい。迷惑なのだというのを、はっきりと言ってやらなければ…。

ダイルが結婚を申し入れてから三カ月がすぎたある日、堅い決心を胸に、アリアは天幕の仕切りを開いた。

やめればよかった…と、今だから思う。そのまま、無視していればよかったのだ。

そうしたら、彼も諦めたかもしれない。

ずっとあのまま無視していたら…。

けれど、アリアは彼に会ってしまった。

天幕から出て来たアリアを見て、ダイルはとても驚いていた。

そして、

「やっと、会えたな」

琥珀色の瞳を眩しそうに細め、吐息まじりに言い、屈託なく嬉しそうに笑った。

あの、表情。

あれは…反則だ。いきなりあんな全開の笑顔を向けられたら…何も言えなくなる。本当は言ってやろうと思っていた事が色々あったのに…問いただしてやりたいこともあったのに…心底嬉しそうに彼が笑うから、何も言えなくなってしまった。ただ、呆然と彼を見つめ返す事しか出来なくなってしまった。

ダイルの思いがけない反応に面食らって、それからはずっかり彼のペースで話は進んでしまい…結婚の話もトントン拍子に進んで…気付けば、アリアはダイルと婚約していた。

情けないけど、あの笑顔に負けてしまったのだ。あの笑顔の純粋さに折れてしまった。

人生一寸先は闇。とはよく言ったもので、何が起こるかわからない。

アリアの人生設計では、ダイルより堅実な男と結婚し、子供を産んで育て、穏やかで平凡な人生を送るはずだったのだが…あの男、ダイルが相手では、それは到底望めそうもない。

「子供の頃から、ずっと好きだった」

婚約者となったアリアに、ダイルは赤茶色の髪を風に踊らせ、琥珀色の瞳を真っ直ぐに、照れたようにぶっきらぼうに言った。

自分に向けるそのまなざしを、少年のような、その瞳を信じようとアリアは思った。その瞳に嘘はないと感じたから。

彼は奔放で、何よりも縛られるのを嫌って、親や兄弟の言うことも聞かず、傭兵なんかをやっている青年で…きっと、この先も彼は少年のように、何にも縛られず生きていくのだろう。

それ故に一緒にいる者は苦勞するであろうことはわかっているのだけ…。

縛ることはできない。彼の自由な魂を誰も縛れない。たとえ、どんなに彼が自分を愛してくれていても…。

こんな馬鹿な話はない。一方的に求婚されて…望まれて、選んだのは自分。本来なら、立場は逆なはずなのに。

それでも、自分は彼と一緒にいることを選んだのだ。だから…後悔はしない。していない。選ばれたのではない。仕方なくした結婚でもない。親に望まれたから、ダイルに求められたからではない。自分が彼と共に生きる事を望んだのだ。

「……ばか」

それでも、アリアは呟かずにいられない。

自分を残して、仲間と冒険に行き、戦士として生きようとする彼を。

心配で胸が痛くなるアリアの気持ちをわかってるだろうに、決してその気持ちに応えられない彼を。

戦いに勝ち、名を揚げ、金をとり…生命の危険とひきかえに、なぜ、そうまでして戦いに身を置く必要がある？決して豊かになりたわけではないのに…自分が望むのは、もっと違う、別の事なのに…でも…それは言えぬこと。彼を縛れない。縛りつけておけるなら…どんなにいいだろう。

でも…できない。出来ぬ程に彼を愛してしまったから。

やりきれない思い。愛しているから縛りたい…愛しているから縛れない。誰もが抱き、誰もがたどつく思い。その思いは変わる事なく均衡を保ち、同じだけの力でアリアを縛する。

そして、こんな思いを抱ける相手はダイル以外には決していないことも、アリアは知っていた。

「そんな顔、するな」

ダイルは言っ、銀製の首飾りを妻の手に握らせ、笑う。彼の首にも同じ首飾りがあった。

「離れていても、いつも一緒だ」

優しく言うダイルを、妻のアリアはなじりたいと思った。

そんなの気休めだ！旅に出てしまつたら、忘れてしまুকせに。
遊びに夢中になつた子供みたいに、私の事も…何もかも忘れてしまুকせに！！

言いたくて…言えない言葉。この少年はずっとこうして自分を苦しめるに違いない。

わかつていても、離れることは出来ない。どうしても…わからない。初めに求められたのは自分の方なのに…いつの間にか逆転している関係。追い掛けるのは自分。

「アリア？」

優しく、残酷な声。愛しくて、憎らしい少年。

泣き出してしまいそうな自分を押し込めて、アリアは彼を見つめる。

「約束して…必ず帰ってくるって」

彼の胸元を掴んで言うアリアに、ダイルはニヤリと笑って問う。

「心配？」

意地の悪い問い。余裕しゃくしゃくな態度に、張り倒してやりたいと本気でアリアは思う。

翡翠色の瞳が揺れる。

泣いてはだめ。泣いて『行かないで』なんて言うほど、惨めなことはいないんだから。

本当は言つてしまいたい気持ちが溢れ出しそうになっているけれど、そんな女はきつとダイルは嫌いだから。そんな私を彼は望まないから。

唇を噛み締めて、アリアは自分の指を強く握りしめる。

「ちゃんと帰ってくる」

大きな手がアリアの頬に触れ、自信に満ちた声が言い切った。

ほんとに？絶対…？

アリアは心の中で彼に尋ねる。

「約束する。どんなことをしても約束は守る」

自分に触れるダイルの大きな手をアリアは胸に抱きしめる。
不安で、心細くて、心が散り散りになりそうだ。

「約束するから…泣くな」

囁くように言い、抱き寄せる彼の肩に、溢れてくる涙を隠すように、アリアは頬を寄せる。

どうしたら、この少年をとめられるだろう…？

そんなことを本気で考えている自分が、アリアは哀しかった。

「そうだ。戻る時には、毛皮を持ち帰ろう。お前は寒くなると、よく寝込んでいたからな…昔から」

そう、優しくに言う彼の言葉に、アリアは首を横に振る。

そんなものはいらないのだ。何もいらない。ただ、ダイルが傍にいれば…いつも共にあれば、それでいいのに…。

楽しみにしている、と自分を見て笑う彼の心は、もうここにあつて、ここにはない。

新しい冒険への期待でいっぱい、他のものはないに違いない。
強く目元を拭い、瞳を上げるアリア。

「…気をつけて」

背を向けた彼の瞳に、もう私は映らない。この背中を、何度見送
っただろう。

こんなに苦しい気持ちで…。

婚約者から妻という立場になっても変わらない痛み。

それでも…彼の帰る場所を守るのが自分の役目だと、苦しいくら
いにわかってしまう。自分は彼の帰る、唯一の場所だと。

そう…自分は充分過ぎるほど、わかっているのだ。

眠れずにいたせいか、体が重い。何だか、熱っぽい気もする。

最近は随分、丈夫になったはずなのに…油断したかな。

アリアがぼんやりと思った時、天幕が開いて、ウーナが顔を出し
た。

一つ年上の青年、イエイと結婚した彼女は、アリアと唯一同年
で幼い頃からの親友だった。

「おはよ。あら、なんか顔色悪いわねえ…それに少しだるそう」

長い付き合いで、アリアのちょっとした体調の変化や異変に敏感
になったウーナは言う、彼女の額に手を置く。

「んー、少し熱っぽいかな…今日は寝てた方がいいわねえ。あ、何
か食べられそう？なんか消化のいいもの作ってくるけど」

「あんまり、食べたくない…」

「だめだめ。少しでもいいから食べないと。体力ある方じゃないん

だから！ちゃんと食べて、寝る。そしたらすぐに元気になるわよ」

肩までの黒髪をはらい、ウーナは小さく息を吐き出す。

それから、薄い緑色の瞳をわずかに揺らして、天を仰ぎ、大きく溜め息をついた。

「こういう時、最愛の旦那がいると心強いのにね。うちのもアリアんとこのも、まーったく何考えているんだか。心配かけるのが、仕事よねーあいつらは」

彼女の夫イエイは、幼い時からダイルと最も親しい友人で、参謀だった。

そして、今も二人は共にあり、世界を旅している。

幼い頃からの悪ガキコンビは、まるで双子のようにいつも共にあり、世界を飛び回っている。二人にとって、世界は広く、どこまでも続いている、それを知りたいと冒険するのは当たり前のことなのかもしれない。あの、いつまでも少年のような二人ならば。

「もーちよつと堅実な生き方してくれたらねえ…あたし達の苦勞も減るってものよねえ…」

しみじみ言うウーナに、思わずにうなずいてしまうアリア。

「ま、とにかく今日はゆっくりしてなよ。皆にはあたしから言っておくから」

「うめんね…」

毛布に顔をうずめるようにして、つい詫びてしまうのは、昔から

この手の迷惑を彼女にかけっぱなしで、その度に世話をやいてくれる彼女に申し訳ないからだ。

いつか、どんな形でもいいから、その分を返したいとアリアはいつも思っている。

大きく手を振り、天幕を出ていくウーナを見送って、アリアは大きく溜め息をつく。

ウーナは大切な友達だから、いつも対等な立場でありたいと思う。私のもう少し丈夫な体なら…違っていたかもしれないのに…。

考えているうちに、ようやく重くなって来たアリアは瞼を閉じた。そして、そのまま吸い込まれるように眠りの淵に墜ちていった。

人がいた。黒いマントの数人…まるで魔術師のようだ。戦士。それから…人と呼ぶには異形な存在。頭に角がある。口からは鋭い牙が見えている。

目の前には、見たこともない風景が広がっている。広い原野…知らない光景ばかりだ。傍らには黒髪の青年。これから始まることへの期待で、強い輝きを放つ碧い瞳。

少しきつい感じのする眼差し…これは…

異形な存在が唸りを上げて、襲い掛かってくる。

何故だろう？胸が熱い…不思議な高揚感が全身を包む。

傍らの青年も同じものを感じている。確信的にそう思う。

カキン…と剣のぶつかり合う音。

傍らの青年が、見事な動きで相手の攻撃を避ける。そして、斬り込む。

一瞬、目の前が真紅に染まったような感覚。飛び散る真紅。真紅の飛沫！？

これは……血だ！！

見回せば、辺りは血みどろな光景で溢れていて、自分もこの血まみれの戦いの中で、確かに人を殺めている。

目の前に襲いかかる刃。それをかわし、自らの剣で受け止め、斬る。

容赦のない……まさに戦い。殺らねば、こちらが殺られる。

斬る度に飛び散る真紅。自分に降りしきる真紅の雨。

……何故、自分はこんなにも落ち着いているのだろうか？

むしろ高揚感があるということは、この戦いに何かを見だし、殺戮というものとは違う何かを感じている……？

本来ならば、こんな風に落ち着いて考えている余裕などないはずなのに……。

目の前で繰り広げられる光景に、耐えられるはずがないのに……
何かが違う？ 変だ……。

漠然とした疑問。違和感。

それでも……溺れるように、この妙な高揚感で満たされて……何も考えられなくなる。考えたくない。

今はただ、目の前の現実（こと）に集中するのみ。

現実（こと）に勝つ事のみには、己の生きる術はないのだから――！！

右手に握る剣の柄の感触。もう長いこと馴染んでいる剣だ。

自分の傍らにはこの剣と、そして、黒髪の一つ年下の青年が常に

共に在る。

ずっと一緒に育った。親兄弟よりもずっと近い存在。自分の半身のような存在。自分が在るところに必ず在るべき存在。友であり、兄弟であり、半身。

血の繋がりよりもずっと強く、深い絆で結ばれた存在の、その青年が見事な剣さばきで敵を断つ。

腰までの長い髪は黒く、カラスの濡れ羽を思わせる。その瞳は碧く、ややきつい印象のまなざし。いつでも冷静で取り乱す所など見たことがない。

自分とはまるで違う容姿。性格。

けれど、これほど気の合う存在は二人と居まい。

抱えている魂が似ているんだと……いつか彼が言った、あの言葉は今も忘れられない。

こんなに世界は広く、人間など星の数ほどもいる世の中で、そういう人間に出会える可能性はどれほどのものだろう？

それを思う度、自分は幸せ者だと思わずにはいられない。愛や恋心などでは決して手に入られない、類い稀なる存在に自分は出会えたのだ。

ゾクゾクする！こいつは決して、自分の期待を裏切らない。

「ダイル！よそ見をするな！！」

黒髪の青年、イエイの喝がとぶ。

「悪い！お前の美しさに見とれていた！」

声を上げて笑い出しながら、目の前の敵を斬り捨てていく自分に、

「ふざけたことを。そういうことは、愛しい妻^{アリア}に言ってやれ！」

同じように剣を振るい、不敵な笑みを浮かべたイエイが言い放つ。
まったく、口が悪い。こういう所はよく似ている。

いや…長い間に似てしまったのかもしれないな。

イエイにチラリと目を向ける。目が合う。その瞳に浮かぶのは、
同じ光。

今、感じているこの手応え！高揚感！すべてを共有している実感。
生きている手触り！！

自分に向かって、斧が振り下ろされる。振り下ろされるより、一
瞬早く、相手を斬り裂く。

「そう簡単に殺られるわけにはいかないのだな」

小さく笑い、音を立てて崩れるそれに言い捨てた自分に一瞬隙が
生じたのはその時。

振り向いた自分の耳に後方に控えていた魔導士の呪文を唱えた声
が微かに聞こえてきた。

このタイミングで、状況で避けられるとは思えなかった。

色々な場所、様々な相手と戦って来たから、わかる。

魔導士の手から、人間の身体など簡単に貫き、引き裂く光が放た
れる。

死を覚悟した瞬間。脳裏に浮かんだのは、色素の薄い栗色の長い
髪と白い肌、翡翠石を思わせる瞳を持つ少女の顔。

アリア……。

幼い頃、病弱だった彼女を見舞ったのは数回。

普段、外に出ることがなかった彼女とは殆ど面識はなかった。

見舞った華奢な体の少女は、熱のせいでどうにも気怠げで、起き
上がるのもやっとという感じで…そして、生まれてから一度も太陽
の光を浴びたことがないのではないかと思うほど、青白い顔をして

いた。

「大丈夫…いつものことだから。せっかく来てくれたんだから、もうしばらくここにいて、話し相手になつて。毎日寝てばかりでは、体がよくなつても精神が病んでしまつわ…」

どう見ても、身体がつらい様子なのは一目瞭然なのに、早々に帰ろうとした自分たちを引きとめ、花のようにフワリと微笑む。

そして、そのはかなげな外見とは裏腹に、瞳の強さは尋常ではなく、彼女にまっすぐに見つめられると誰もが一瞬言葉を失い、彼女の翡翠色の瞳から目が離せなくなった。

ダイルは、こんなに小さな女の子のどこにそんな力があるのか不思議に思った。

見舞いに訪れる度、その疑問は深まり、興味をそそられた。

彼女の瞳の強さは、生きようとする意志の力なのだと、生命力のありようだと気付いたのは、ずいぶん後のことだったが、気付いた時にはすっかりころんでいた。

彼女しかいないと思った。自分の伴侶になる女は彼女、アリアしかいない。

弱いだけの女はうつとおしいし、強いだけの女は可愛くない。

誰もが弱さと強さを併せ持っている。そのバランスはみんな違うもの。その時々々の精神状態や状況によっても変わる。

だが、そう…勘だ。彼女は自分の望む強さと弱さとを持ち合わせる存在だと。あの翡翠色の瞳に感じた。幼い時から、無意識にずっとそれを感じ取っていた。そして、それは確信となった。

別れる時、必ず戻ると約束した。約束を違えた自分を彼女は許さないだろう…あの、気丈な娘は。

生きようとする精神力は女の方が上だ。

その点においても、彼女は自分の望むべき存在。たとえ、どんな

ことがあるうと生き続ける。そういう女だ。憎しみを糧にしても、あれは生きていくだろう。

もったも、そうでなくては、こちらとしても困る。

それぐらいの女でなくては、安心して世界を飛び回れない。帰る場所が揺らいでもらっては、男は安心して遊び歩けない。

それで、女が傷つくとしても…そうあるべきだろうと自分は思う。勝手な言い分なのは百も承知だ。こんな男の妻になった彼女は、決して幸せではない。それは、よくわかっている。彼女が望んでいるものが何かも。

わかっていても、自分には彼女が望むようにはしてやれない。自分が自分でいられないならば、生きている意味などない。

常に生きている感触を感じていたい。

そう思わずにいられない。そうすることを、思いを止められない。それでも…こんな瞬間に、もう少し傍にいてやってもよかったかもしれない…と思ってしまうのは、罪悪感からだろう。

ダイルの脳裏に、死の間際、浮かんだ翡翠色の瞳の少女は泣き出しそうな顔をしていた。

それは、別れ際に見た彼女の姿。

そして、次の瞬間、彼の視界が閃光に包まれ、真っ白になったと同時に、彼の脳裏に浮かぶ彼女も消えた。

もう、だめだ！！自分は死ぬのだ。

そして、それも仕方ないだろうと思った。

戦いというものはそ

ういうもの。死者の上に戦に勝った者の生があるのだ。
諦めと悟りがまじりあう不思議なほどに静かな思いに包まれていた。

ふいに、少女の顔が頭に浮かぶ。

長い髪。肌は白く、その瞳は翡翠石のような輝き。

この瞳を、この少女を自分は知っている。

そう、知っている。わかっていた。

最初からなにかがひっかかっている。変なのだ。

変？何が…？

何かが……違う…？

おかしい。考えがまとまらない。なぜだろう？自分の身に起こっていることなのに、自分のことなのに、混濁しているような感覚。自分じゃないような…そんな違和感がある。

確かに今、ここに存在しているはずの、感覚：感触はあるのに、それと同時に、瞬間的に何もかもが希薄になるような…。

死に直面しているから？

……違う。もっと前から感じていた。自分が自分ではないような、そんな感覚。

答えが見つかりそうになると、不意にわからなくなる。自分の中に埋没していく。もう少しで見つけられそうなのに、掴めそうで掴めない答え。

死は目の前に横たわり、自分を飲み込もうとしていた。
死神の手が包み込む寸前に、彼女は真実^{こたえ}を見つけた。

そうだ。そうなのだ。そうよ、この違和感は当たり前なのだ。当たり前で簡単なこと。

自分はここにいない。いるはずがない。

これは私の見ている風景ではない。

私は熱を出して自分の天幕で寝ているのだから。

そう、思った彼女の耳に、次の瞬間、聞こえてきたのは壮絶な叫び。

その叫びは身体を裂くような圧倒的な痛みを伴い、彼女を襲う。

その叫びは、耳ではなく、心に響く。柔らかな心に深く斬り込む鋭い刃のようだった。

その痛みと衝撃に、息も絶え絶えに目を上げた彼女は見た。

狂気に我を忘れ、殺戮の中、全身を朱に染めながら魔道士の体を貫いている彼の姿を。^{ダイヤル}

その瞳には壮絶な憎しみと悲しみ。激しく大きな嘆きと絶望が彼の周囲の空気さえ染め上げ、慟哭していた。

…魂の、悲鳴だ。

彼の内側から流れ出す魂の血が世界を染める。

その、あまりにも壮絶な光景に呆然とするアリアが最後に見たのは、カラスの濡れ羽のような髪 of 青年が、自らの血の海の中に倒れている姿だった。

今まで見ていたものが、感じていたことが何だったのか、誰のものなのか…アリアはその瞬間、全てを理解した。

目が覚めた時、アリアは泣いていた。

ただの夢だと思いたかった。思おうとした。

けれど、それは出来なかった。それが夢ではないことをアリア自身が強く感じ、理解していた。

まれに、それは起こる。自分が知らないはずの場所で起きている出来事を、他人の体験をまるで自分が体験しているような感覚になる。それは決まって、夢の中だけに限られているけれど。

最後にこの不思議な夢を見たのは十年以上前。アリアの祖父が砂漠で盗賊に襲われた時だった。

身体の弱かったアリアは他人の心の動きに敏感な少女だった。

鋭敏過ぎるアリアの心は彼女の自我が薄れる睡眠時。無意識の領域で自分の大切な人の心の声に感應する。

それが切迫したものであればあるほど、鮮明に現実と見分けがつかないほどリアルな手触りで彼女に迫ってくる、不思議な夢…。

あれは…おそらく現実で起こった出来事なのだろう。

遠い地でダイルが見た光景。彼の身に起こった現実。

それが、嫌でもわかってしまうから、苦しかった。

黒髪の青年… イエイは、咄嗟にその身体を盾にしてダイルを守ったのだ。

ダイルがイエイを思うように、イエイにとってダイルは大切な存在だった。そう、己の半身のような存在だったに違いない。

あまり多くを語らない青年だったけれど…。

ダイルは目の前で自分の半身を殺された。彼は自身の半分を失ったのだ。

あの嘆き、あの痛み… 心ごと吹き飛ばされてしまいそうな圧倒的

な激情。

すべて、あれはダイルのもの。

自分はずっとダイルの瞳に映ったもの、彼の感じたものを自分のもののように感じていた。

擬似体験……いや、そんなものじゃない。

だって、私は確かにあの時に彼に重なりあっていた。彼自身だったのだから。

涙がとどめなく流れる。彼の痛みが、嘆きが……目覚めてからどんどん遠くなる。残るのは、痛みがあつた事実だけ。

彼の嘆きも悲しみも痛みも……もう自分のものではない事実。わかりたくても肌で感じられない事実。

思い出せない。指の間から零れ落ちてしまう砂のように、少しずつ遠のいてなくなっていく。

悲しかった。痛みとひきかえに切なさが増していく。

わからない。自分には彼の嘆きの深さも痛みも。

想像は出来ても、感じることは出来ない。心で直に感じられない。今はもう……私は彼ではないのだから……。

一週間後。ふらりとダイルは帰って来た。

いつもと変わらない調子で、帰ってくるなり上等な毛皮をアリアに押し付けるように手渡し、ニヤリと笑う。

「戦利品だ。約束通り、無事に戻ってきたぞ」

手に入れた品々を出しては、饒舌に話し続けるダイルに哀しくなりながら、アリアは弱く微笑む。

「どうした？ 顔色が優れないようだが…」

浮かない表情のアリアを見て、ダイルが眉をひそめる。ご丁寧にアリアの額に自分の額をくっつけて、熱がないのを確認しながら言いたいことは、アリアの頭と胸の中でグルグル回っていた。でも、何を言ったらいいのかわからなかった。

ダイルの心はきつと、今も血を流しているに違いないのに、それを癒す言葉を、手立てを見つけられない。

そんな自分をアリアは蔑んだ。

どうした？ とアリアを覗き込む瞳。よく知っているまなざし。

けれど、同じようでも違うのだ。以前の彼には戻れない。どんなに望んでもそれは出来ないのだ。起きてしまった事実は変わらない。変えられない。

痛い…。胸が…。心が…。

ダイルの心が悲鳴を上げているのがわかるから、それを自分のものとして感じられないのが悲しい。

わかりたいのに。感じたいのに。癒したいのに。

屈託なく笑う、その裏で、泣いている彼が見える。それなのに、目の前には泣けない彼がいる。

余りに痛すぎて、失った衝撃が強すぎて、泣けずにいる彼がいる。そんな彼が、あまりに哀しくて…そして、たまらなく愛しい。

「アリア？」

不思議そうに自分の名を呼ぶ彼を、腕を伸ばし、アリアは抱きしめる。

頬を寄せるアリアの長い髪をダイルが撫でる。愛しげに。

私が、いる。

呟きはかすれて、うまく声にならない。

「私が…いるから…」

アリアの呟きに、彼女の髪を撫でる手が動きを止める。

顔を上げて、アリアはダイルを見つめた。翡翠色の瞳にすべての思いを込めて。

「ずっと…いるから…あなたが望む限り…ずっと」

ダイルの琥珀色の瞳が大きく見開かれる。

こんな言葉では足りない。どうしたら、彼の心を癒やせるのだろう？

何でもするのに。ダイルの心の傷が少しでも癒えるなら、流れる血が止められるなら。

なのに。なんて、私は無力なんだろう。

「アリア？」

頬を包む大きな手を引き寄せて、アリアは口づける。

自分の手にそっと唇を寄せるアリアを見つめていたダイルは、心に何かが染みていくのを感じていた。

彼女の温もりは、傷ついたダイルの心を優しく包む。それは徐々にダイルを満たして、温かく、優しく包み込む。

不思議な安堵感が彼を満たしていた。
それが何なのか、わかった気がしたダイルは目を伏せた。琥珀色の瞳が僅かに揺れ、影が落ちる。

「なにもかも：失ったわけではないのかもしれないな」

低い小さな呟き。それにアリアが目を上げると、そこには心細い、迷子になった子供のような瞳をしたダイルがいた。

「俺には、帰る場所があるのだから……」

瞳が合った彼女を強く抱きしめた彼の肩は、わずかに震えていた。

翌朝、アリアが目覚めるとすでに身支度を整え終えたダイルがいた。

「また出かけるのね？」

問うたアリアにダイルは何も言わない。

それが答えだと、アリアは思ったし、ダイルを行かせてあげることにしか出来ないことも解っていたから、止めはしなかった。

彼の半身を失った痛みをアリアは癒やせない。それはダイル自身の力で癒さねばならない傷だから。

村外れまで送って行ったアリアはダイルに言った。

「いつてらっしゃい。私：待ってるから」

あなたが帰ってくるまで私は待っているから、疲れたらいつでも戻って来て。あなたの帰る場所はここなのだから。ここしかないの

だから。

ダイルは小さく笑って、その手でアリアの髪を優しく撫でた。繰り返し、繰り返し、自分の髪を撫でるその手の温もりを、アリアは心に刻み込む。

やがて、砂漠に向かって歩き出した彼の背中を見つめるアリアの翡翠色の瞳には、迷いなどかけらもない、強い何かが浮かんできた。砂漠が続く、この向こう側に何かがあるのかアリアは知らない。ダイルの求めるものもアリアには理解できない。

ダイルの片翼にはなれなくても、彼の帰る巢は作れる。守れる。いつでも疲れた彼を迎え入れてあげることができる。その傷ついた魂を抱きしめることは出来る。

ダイルの背中が小さくなる。見えなくなるまで動けないのは、やはり女の身だからだろうか…？

ふと、アリアはそんなことを思い、自嘲する。

女はいつも置いていかれる身。

けれど、人にはそれぞれ役割があるのだろう。

出来ないことを嘆くだけなのは愚かだ。人は出来ることを成すしかないのだから。自分の出来るをしていくしかないのだ。今の精一杯で生きていくことしか出来ないのだ。

それがすべて。真実。

見えなくなった愛しい存在に背を向け、アリアは歩き出す。翡翠色の眼差しは、まっすぐ前に。

彼は戻ってくる。いずれ、自分の元に翼を休めるために。

それよりも今は、親友の側に戻り、出来る限りそばにいたかった。村を出る前、イエイの伴侶であるウーナにダイルは彼の半身であ

った彼の最期を看取ったことを話し、謝った。

「ほらね、あのバカ！いつか絶対こうなるって思ってた。あたしの忠告も聞かないで、好き勝手していた罰だわ！自業自得よ」

強く言い放った言葉とうらはらに、彼女の瞳が深い絶望に染まっていた。

イエイの悪口や暴言を吐きながらも、誰よりも彼を愛している彼の身を案じて、彼女が心を傷めていたのをアリアは知っている。それは自分も同じなのだから。

だから、彼を失った彼女の心情は理解できてしまう。

「女は損よね。結局、惚れた男にはかなわないんだから」

いつか彼女が言っていた言葉。

ダイル同様、あの黒髪の青年を失って、心を裂いているのはウーナも同じ。

アリアはダイルの心の傷は癒やせない。女であるがゆえに、彼の心を理解できない部分があるから。

けれど、ウーナの悲しみは同じ女の身として、同じような立場にいた自分でも理解できるのではないだろうか？何か出来るのではないだろうか？

たとえ、何も出来なくてもそばにいたい。

幼い頃、孤独にうち震えていた私をウーナがそばにいて救ってくれたみたいに。

孤独の海に彼女がとりこまれないように、今度は私が彼女のそばにいてあげたい。

アリアはもう一度だけ、ダイルの面影を抱きしめ、振り返る。

たぶん…離れていても、愛する人のそばに私はいるのだ。

心は決して離れることはなく……彼の声を聞いているのだ。いつも。

聞こえるはずのない声を、確かに私は聞いたのだから。

出来ることならば、私の声も彼に届いているといい…。

いえ、きつと届いてる。そうだよな？

どうか、無事に帰って来て…。

祈りにも似たこの思いの聲が、どうか彼に届きますように。

砂漠の真ん中に彼はいた。自分の半身のようだった青年の剣が、その手には握られている。

ダイルは身動きもせず、その剣をじっと見つめていた。

それはもう、決して戻ることはない、かけがえのない存在への別離^{かれ}の儀式だったのかもしれない。

時間を戻せるならば…。

何度もそう思った。

けれど、それは叶わぬ願い。過去は戻らない。消すことも出来ない。

今は亡き、半身の物である、その剣を砂に突き立て、ダイルは苦しい想いを噛み締める。

まるで墓標のようだ。他の誰もが彼を忘れても、自分だけは忘れない。その、印のようだ。

これは一生、自分の胸から消えることのない、背負うべき痛み。肉体的な苦痛さえ伴いそうな、強烈な痛み。

自分のために死なせてしまった友の喪失感以外の外、大きい。

ダイルは、しばらくその剣の前で立ち尽くしていたが、やがてゆ

つくりとそれに背を向け、歩き出す。

風が吹き、砂が舞い上がり、彼の赤茶けた髪をさらう。

その風に、彼のよく知った声を聞いた気がして、ダイルは振り向いた。

琥珀色の瞳がわずかに開かれる。

耳をすませたが、もう何も聞こえてこない。

聞こえるのは砂漠に吹きすさぶ風の音だけ。

しばらく風の音色に耳を傾けていたダイルは、やがてゆっくりと、けれど、強い足取りで歩き始めた。

「…前へ」

風が彼の髪を踊らせ、彼の声をかき消す。

「…前へ…進まねば……………」

その瞳に宿るのは強い光。真っ直ぐに見据える、そのまなざしの行方^{さき}に見ているものは……。

「たとえば、何があろうとも……どんな時も前へ」

砂漠に風が吹く。その風が囁く。

それはきつと、あの者の声。あなたの、望む声。

誰もが誰かの大切な存在。

愛する人の声をどうか……。

風は吹く。吹き続ける。

この思いのある限り。

FIN

（後書き）

やーっと、終わりました。そんなに長い話ではないのに、完結まで時間がかかってしまい申し訳ありません；
やっぱり、携帯から打ち込みはつらいですわ。

さてさて。今回の「Voice」はいかがだったでしょうか？

作品の最初にも書きましたが、これは私の書いた詩を元に描かれた漫画が原作になっています。

かなり勝手に、私が設定とか作っちゃってますけどね。

でも、元が私の詩のせいかな、他人の作品を文章化するなんて大事も、意外とすらすらすらと書けたような気がします。

名前もかなり適当に思い付くままにつけた気が…。

アリアは「G線上のアリア」から。ウーナは喜劇王、チャーリー・チャップリンの最後の奥さんの名前。ダイルとイエイはなんだったかなあ。（^ー^；）

ああ、でも、イエイは親友がモデルです。

…女の子だけど（笑）。

私にとって彼女は、ダイルにとってのイエイみたいな、半身みたいな存在なので、感情移入はダイルに一番していたかもしれない。んー、きっとダイルもイエイにラブラブだな。あ、やばい。BL系になってしまう（笑）

それと同時に、実はアリアとウーナも私と親友を投影してたりするのです。

「Voice」は内容的にちょっと重い部分がありますが、決して悲しいお話にはしたくないと思っていました。

私の持論ですが、どんな悲しみも苦しみも無駄なものはない。その人に必要だからあるのだと思っています。

そして、明けない夜がないように、どんなに深い悲しみも時間という秘薬に少しずつ癒され、薄れていきます。

消えることはなくとも、痛みは薄れ、記憶は遠くなる。

善きにつけ悪しきにつけ、人間は忘れていく生き物で、そうしないと生きていけないのかもしれませんが。

人生の中で大切な人との別れ。特に死は、言葉では言い表せない大きな喪失です。

けれど、その傷は大切な人がいた証拠であり、痛みは確認にもなります。

まあ、それすら人間は生きていくうちで少しずつ昇華していつてしまふのですが…完全になくなることはありません。

だから、前を向いて痛みに残る髪をひかれながら生きていく姿は悪くないと私は思っています。

ダイルはずっとイエイの面影を抱きしめ、求め続けるでしょう。

それが彼の生きている証でもあります。イエイの声をいつもダイルは聞いてゆくのです。

私やみなさんがそうであるように。

大切な人の声は、どんなに時が過ぎて、記憶が風化しても…聞こえてくるのだと思います。

耳ではなく心に。

そついう、大切な人への想いをこの作品には込めました。

願わくば、あなたの声が大切な人にいつも響くように。

大切な人の声が聞こえるあなたでいられますように。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

2006年 冬。風が吹きすさぶ日に。

以下、原案になった、私の詩です。

V o i c e

あなたの心が 悲鳴をあげた夜

私の心は 眠りの淵で その声を その嘆きを 感じていた
こんなに遠く こんなに深い 二人の その頼りない絆は
途切れそうで 多分 ずっと 切れない

あなたの欲しい言葉を 私は言ってあげる

あなたの望んでいることを 私はしてあげる

あなたの求めていることは すべて

私がしてあげるから そんな風に茶化したりしないで

あなたの心が 絶望の淵に ゆっくりと 沈んでいく
その流れに その激しさに 逆らえなくても

それでも 腕を伸ばし 声を出して 私を呼んで欲しい
堕ちていく その未来が たとえ どんなでも

あなたの痛みを 私が感じられる
あなたの苦しみを 私が知ってる

あなたが泣けない時は いつも

私がそばにいてあげるから そんな風に笑ったりしないで

茶化したりしないで

笑ったりしないで

そんな風に強くなったりしないで…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6754/>

Voice

2010年10月8日21時07分発行